20240303　朝礼拝　ヨハネによる福音書 6 章 66～71 節

「織り込み済み」

教会は、昔から「食卓共同体」と呼ばれていました。一緒に食事をする仲間たちということですね。この「食事をする」ということには、聖餐式も含まれていますが、重要なのはもっと素朴なところで、文字通り、ご飯を食べること、ご飯を食べながら温かな交流を持つことです。だから、コロナ禍の間、教会で一緒に食事ができなかったということは、教会の歴史上、とてもつらいことでした。

「食事をする」ということに、キリスト教がどれだけ重点を置いているのかを考える上で、とても面白いことを仰る教会員さんがいました。私の母教会の御婦人の方でしたが、この方は「主の祈り」の言葉の順番について、こんな風に仰いました。「私は、主の祈りの中で、人の罪をゆるすことの前に、今日のご飯をくださいって祈ることができるのって、本当にありがたいと思うの」と。つまり、この箇所のことですね。「我らに罪を犯すも者を、我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしまえ」という罪のゆるしに関わることよりも前に、「我らの日用の糧を今日も与えたまえ」とあると。これって、ようするに、どうしても人をゆるせない場合でも、ご飯を食べて良いってことですよね、と。この御婦人教会員さんは考えたわけです。腹が減っては戦もできないけど、人をゆるすこともできないから、とりあえず、神様、ご飯をください、と。この考え方を聞いた時、当時、大学生だった私はえらく感動したものです。まぁ、主の祈りの言葉の順番が、そのまま優先順位とは限らないのですが、そういう考え方もあるんだなぁ、ということです。こういう観点からも、キリスト教は、やっぱり「食事をする」ことを大切にしていると言えるかも知れません。

今日の聖書箇所は、66 節から 71 節ということで、非常に長いお話の最後の一部分となっていま

す。この長い6章のお話の、その最初の部分は「五千人に食べ物を与える」というものでした。有名な「五千人の供食」あるいは「五千人の給食」と呼ばれる箇所です。まぁ、ようするに大勢で食事をしたというお話です。もちろん、その食事の提供方法が、このお話の肝となっていますが、今日のところは、そこは触れません。とりあえず、大勢みんなでご飯を食べたんだと。で、「五千人に食べ物を与える」というお話が終わると、「湖の上を歩く」という、これまた有名なお話が出てきます。そして、次に「イエスは命のパン」というお話が続きます。実は、このヨハネによる福音書6章全体は、食事とパンについてのお話に紐づいています。5000人を満腹させた奇跡を起こしたイエス様自身が、本当の命のパンであり、また、その命のパンは、命の言葉であったという。まぁ、ちょっと都合よく「命のパン」と「命の言葉」が入れ替わっていますが、ヨハネによる福音書の最初で、イエス様は、言であり、命であると断言されているので、そのあたりの理解も含めまして、このヨハネによる福音書6章は、食事とパンに関わるメッセージが敷かれています。

ただ、そのメッセージは、現代を生きる私たちにとって難しいばかりでなく、イエス様の御言葉を直接聞いた当時の人々にとっても難しかったようです。今日の聖書箇所の手前にある60節には、こう書かれています。「ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて、言った。『実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか』」。そして、今日の聖書箇所の冒頭部分に繋がっていきます。「このために弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。」最初、多く人々を満腹させた食事から始まる、イエス様の一連の御業や御言葉は、この場面において、拒絶に遭うわけです。これは、ある意味で「教会は食卓共同体」とは言え、ただ食事をするだけじゃダメなんよ、という当たり前のことを教えているのかも知れません。食事を頂くだけでなく、イエス様の御言葉を頂くこと。たとえ、その御言葉が口当たり悪く、苦く、噛み切りにくいものだとしても、いつか味わい深くなることを信じて、頂くこと。ちょっと根気がいるかも知れませんが、少なくとも

ヨハネによる福音書におけるイエス様を受け入れる上では、そういう気の長い姿勢が必要と言えます。

ところで、今、私は「ヨハネによる福音書におけるイエス様」という言い方をしました。なんでそんな言い方をしたのかと言いますと、実は、4つの福音書で、少しずつイエス様のお姿は違っているからです。お姿が違うと言うのは、風貌が異なるということではなくて、言葉遣いや立ち振る舞いに違いがあることということです。それぞれの福音書が書かれた時代背景、福音書記者であるマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネが持っていた信仰的確信によって、福音書に登場するイエス様には、微妙な違いが出てきます。それは、別に悪いことではなくて、イエス様という方を、様々な角度から語ろうとする聖書の果たした努力の顕れであると言えます。そのお陰で、私たちは、単一の福音書だけでは知り得なかった、イエス様の多くの御言葉と奇跡を知ることができ、慰められたり、励まされたりしています。

そして、この「信仰的確信によって福音書に登場する人に微妙な違いが出て来る」ということは、イエス様に限らず、今日の聖書箇所の重要人物であるイスカリオテのユダについても言えることです。ユダも、福音書によって、その描かれ方、評価のされ方が異なっています。最も古い福音書である、マルコによる福音書において、ユダはそれほど詳しく語られていません。マルコによる福音書を下敷きに書かれたとされる、マタイによる福音書とルカによる福音書では、それぞれ独自の解釈を加えて、裏切り者であるユダのことを詳しく報告しています。マタイによる福音書は、裏切った後のユダが抱いた罪悪感と後悔について深く掘り下げており、ユダの自殺を報告しています。一方、ルカによる福音書では、ユダに悪霊が入ったことが明記され、ユダの裏切り行為が単なる個人的な過ちによるものではなく、善と悪の戦いという壮大な物語の中で捉え直されています。そして、最も新しい福音書である、ヨハネによる福音書では、ほかの3つの福音書の要素を取り入れつつ、

ユダのことを、その裏切りが実行される前から「盗人」として紹介しています。12 章 6 節のところですね。「彼は、盗人であって、金入れを預かっていながら、その中身をごまかしていた」と。これは、ほかの 3 つの福音書にはないユダ情報です。実は、このユダに関する情報は、最も古いマルコによる福音書から、最も新しいヨハネによる福音書へと移っていく中で、徐々に「悪化している」「悪くなっている」という傾向があります。つまり、新しい福音書ほど、ユダのことを悪く書いている、ということです。ユダの裏切りだけを簡潔に報告しているだけの最古のマルコによる福音書。それに続くマタイによる福音書では、ユダは懺悔し後悔の果てに自殺しています。自殺は最悪な結末ですが、ただ、最後ユダに善意が宿ったことを暗示するものです。ルカによる福音書では、ユダに介入した悪霊と言う存在がいるとされており、幾分かユダ個人の責任を軽減している風に読み取ることができます。しかし、このヨハネによる福音書では、ユダは最初から盗人であり、悪いヤツであるとされ、同情の余地を残さない形で取り上げられています。聖書学的に見ると、ヨハネによる福音書に出て来る「イスカリオテのユダ」は、最悪な人物です。今日の聖書箇所において、「あなたがた 12 人は、わたしが選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ」というイエス様の御言葉があり、「イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである」という補足説明がついています。ヨハネによる福音書にあって、ユダは悪魔なんですね。ここの理解は、とても重要です。ルカによる福音書のように悪霊が入って悪いヤツになったのではなく、ユダ自身がすでに悪魔であると。

しかし、考えてみますと、先ほどのイエス様の御言葉にもありますけれども、「あなたがた 12 人は、わたしが選んだ」んですよね。イエス様御自身が選ばれた 12 人の中に、裏切り者であり悪魔であるユダがいた。その事実を受けて、「そっかー、イエス様でも、やっぱりお弟子さんの身元調査を完璧にするのは難しいですよね」・・・とはなりません。イエス様は、ユダが裏切り者であり、

悪魔であると知って、だからこそ、12 人に加えたと考えた方が良いでしょう。つまり、ユダの裏切りは織り込み済みであったと。主の十字架、最初で最後の犠牲の仔羊、全世界の救いのために、ユダは最初から、そのために導かれ、イエス様と出会い、イエス様は全てを弁えた上で、ユダと共にいたのだと。

ヨハネによる福音書において、いよいよユダがイエス様への裏切りをあらわにする時。それは 13 章 26～30 節に書かれていますが、その時は、やはり食事の時でした。最後の晩餐ですね。イエス様は、ぶどう酒に浸したパン切れをユダに渡しつつ、「しようとしていることを今すぐしなさい」と言いました。その言葉と、パン切れを受けて、ユダはすぐに出て行ったと言います。ユダは、この裏切りと決別の瞬間に、イエス様から言葉だけじゃなく、パン切れも受け取ったというところに、なんだか深い意味がありそうな気がします。イエス様はユダとパンを分かち合い、食事を共にするよう働きかけたのです。ということは、やっぱり、イエス様は、最後までユダのことを愛していたのではないだろうか、と思わされます。食卓を共にする弟子の一人として、ユダを受け入れ、そして、ある意味で最も過酷な役割へとユダを促していったのです。

今、私たちが過ごしている受難節は、このイスカリオテのユダを巡る深遠なる御計画に心を向ける日々でもあります。単なる悪人と断じるには複雑過ぎるユダという人物を通して、私たちは、神様の御心の深さと、イエス様の愛の深さを知ることが出来ます。そして、復活と言う結果に至るまでの全ての出来事が、「織り込み済み」であったことを知って、私たちの人生における全ての出来事が、神様の御計画と配慮の上に起こっていることに信頼と安心を見出していきたいと思います。たとえ、今、困難の中にあるとしても、人生の受難節真っ最中だとしても、必ず最後には、命を回復させる喜びが備えられると信じて・・・ですね。そして、とりあえず、みんなで一緒にご飯を食べて、聖書から御言葉を頂いて、古来続く教会の古き良き伝統を守っていきたいと思います。

神様は、罪深さを憶える人に、必ず豊かな食事を用意してくださると私は信じています。お祈りを致します。

神様。

今日も私たちをこの礼拝堂に招いてくださり、ありがとうございます。あなたは計り知れない御心をもって、この世を支配され、すべての出来事に意味と目的を定められました。福音書が幾重にも重ねて語ろうとしているイスカリオテのユダを用いて、あなたは主の十字架を実現され、私たちの罪を覆い隠す御業を示してくださいました。この受難節の間、私たちはあなたの示された類稀な赦しの奇跡を心に留めつつ、そのために犠牲となってくださったイエス様に深い賛美を捧げることができますように。私たちの信仰を支え導いてください。これから分かち合うあなたの聖餐と、そして礼拝後の修養会で分かち合う美味しいパンとを頂いて、今日から始まる新しい 1 週間を元気に歩み出すことができますように。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

聖書：詩編 145 編 8～14 節

主は恵みに富み、憐れみ深く、忍耐強く、慈しみに満ちておられます。主はすべてのものに恵みを与え、造られたすべてのものを憐れんでくださいます。主よ、造られたものがすべて、あなたに感謝し、あなたの慈しみに生きる人があなたをたたえ、あなたの主権の栄光を告げ、力強い御業について語りますように。その力強い御業と栄光を、主権の輝きを、人の子らに示しますように。あなたの主権はとこしえの主権、あなたの統治は代々に。主は倒れようとする人をひとりひとり支え、うずくまっている人を起こしてくださいます。

神様。

今、私たちは春の訪れを感じつつある、この季節に、あなたから尊い命を与えられ、生きる者とされた３月生まれの誕生者の方々を憶えて祈りを合わせています。あなたは、私たちが生まれる前から、私たちの名を呼び、今に至るまで導いてくださった方であることを信じます。この３月生まれの方々も、人生の様々な局面において、主の助けと慰めと祝福を与えられたものと思います。どうか、これから先の日々においても、あなたの御守りの内に、歩むことができますように、しっかりとその御手で支え、また励ましてください。御国に帰る、その日まで、主と共にある幸いな毎日を過ごすことができますように。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。